春はあけぼの。やうやう白くなりゆく
山際、少し明かりて、紫だちたる雲の
細くたなびきたる。
夏は夜。月のころはさらなり…

新经典日本语

古典语法教程

李延坤 编著

外语教学与研究出版社

新经典日本语

古典语法教程

李延坤 编著

外语教学与研究出版社
北京

图书在版编目（CIP）数据

新经典日本语古典语法教程 / 李延坤编著. -- 北京 ：外语教学与研究出版社，2018.12

ISBN 978-7-5213-0556-2

Ⅰ. ①新… Ⅱ. ①李… Ⅲ. ①日语－语法－教材 Ⅳ. ①H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2018）第 286801 号

出 版 人　徐建忠
责任编辑　杜红坡
责任校对　庞梦溦
封面设计　水长流文化
版式设计　彩奇风
出版发行　外语教学与研究出版社
社　　址　北京市西三环北路 19 号（100089）
网　　址　http://www.fltrp.com
印　　刷　三河市紫恒印装有限公司
开　　本　787×1092　1/16
印　　张　14.5
版　　次　2018 年 12 月第 1 版　2018 年 12 月第 1 次印刷
书　　号　ISBN 978-7-5213-0556-2
定　　价　40.00 元

购书咨询：（010）88819926　电子邮箱：club@fltrp.com
外研书店：https://waiyants.tmall.com
凡印刷、装订质量问题，请联系我社印制部
联系电话：（010）61207896　电子邮箱：zhijian@fltrp.com
凡侵权、盗版书籍线索，请联系我社法律事务部
举报电话：（010）88817519　电子邮箱：banquan@fltrp.com
物料号：305560001

序

延坤先生嘱为其新作《新经典日本语古典语法教程》作序，令我犯难。因为我对日本古典文法没有做过系统研究，很难从学术角度进行评论，只能以一个学习者的身份，谈一点学习体会。

在日语中古典语法被称为「文語文法」，日语中的「文語」是相对现代的「口語」而言，指以平安时代的语言为基础发展、固定下来的语言形式。用「文語」写出的文章，不仅对中国日语学习者，就是对日语母语者也是很难的。比如明治时期的「文語」作品便被称为「明治古典」，并出了现代日语译本。「文語」虽已不作为日常语言使用，但却不可不懂，因为无论是做研究亦或欣赏文学作品，还是从事中日跨文化交流方面的工作，都会涉及这方面内容。

延坤先生的专业为日本古典语法，并一直从事该方面的日语教学工作，应该说这本书是他学术研究与教学实践的总结。《新经典日本语古典语法教程》具有以下特点：

一、内容丰富，涵盖面广。本书涉及了词法、句法及社会语言学范畴的敬语等内容，涵盖了日语古典语法的所有基本问题。

二、语言简洁，用例凝炼。本书在参考多部教材及参考书的基础上，尽量使用精炼的例句，并用简明易懂的语言进行说明，便于学习者掌握及使用者理解。

三、注重基础，学用结合。本书把基础知识的学习放到首位，注重以练习的方式巩固所学知识，并以名作鉴赏的方式引导学习者学以致用。

延坤先生编写这部作品的初衷是显而易见的，那就是通过自己的努力，为学习者提供简单、便捷的掌握古典语法的平台，提升学习者对古典语法的兴趣，促进日语界的学术交流与合作。期望广大日语学习者能从《新经典日本语古典语法教程》获得益处，祝延坤先生不断有新的成果问世。

是为序。

陈岩

于日本城西国际大学

目次

第一章　古典文法入門

第一節　文語と口語

一、文語と文語文法……2
二、口語……2
三、古典文法……2
四、文語と口語の違い……2

第二節　歴史的仮名遣い

一、五十音図と「いろは歌」……3
　1. 五十音図……3
　2. 「いろは歌」……3
二、歴史的仮名遣いを読むときの規則……4
三、係り結び……4

第三節　文と文節、単語と品詞

一、文と文節……5
二、単語と品詞……6
　1. 単語……6
　2. 自立語と付属語……6
　3. 活用……7
　4. 品詞……7
　練習一……9

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

第二章　活用のない自立語

第一節　名詞

一、名詞の性質 ……12
二、名詞の種類 ……12
1. 普通名詞 ……12
2. 固有名詞 ……12
3. 数詞 ……12
4. 形式名詞 ……12
5. 代名詞 ……12

第二節　副詞

一、副詞の性質 ……13
二、副詞の種類 ……13
1. 状態の副詞 ……13
2. 程度の副詞 ……14
3. 叙述の副詞 ……14

第三節　連体詞

一、連体詞の性質 ……15
二、連体詞の例 ……15
三、連体詞の種類 ……15

第四節　接続詞

一、接続詞の性質 ……16
二、接続詞の種類 ……16
三、接続詞の例 ……16

第五節　感動詞

一、感動詞の性質 ……17
二、感動詞の種類 ……17
三、感動詞の例 ……18
練習二 ……19

第三章　活用のある自立語

第一節　用言

一、用言の種類……22
二、語幹と語尾……22
三、用言の活用形とその用法……22

第二節　動詞

一、動詞の性質……23
二、動詞の活用の種類……24
1. 四段活用……24
練習三……26
2. ナ行変格活用……27
3. ラ行変格活用……28
練習四……30
4. 下一段活用……31
5. 下二段活用……31
練習五……34
6. 上一段活用……35
7. 上二段活用……36
練習六……38
8. カ行変格活用……39
9. サ行変格活用……40
練習七……42
三、動詞の音便……43
四、自動詞と他動詞……44
練習八……45

第三節　形容詞

一、形容詞の性質……46
二、形容詞の特徴……46
三、形容詞の活用……46
1. ク活用とシク活用……46
2. カリ活用……47

四、形容詞の語幹の用法 ……48
五、形容詞の音便 ……49
練習九……51

第四節　形容動詞

一、形容動詞の性質……52
二、形容動詞の特徴……52
三、形容動詞の活用……52
四、「ナリ活用」と「タリ活用」についての注意点……53
五、形容動詞の語幹の用法 ……54
六、形容動詞の音便 ……54
練習十……55

第四章　活用のある付属語——助動詞

第一節　助動詞の性質と種類

一、助動詞の性質 ……58
二、助動詞の種類……58

第二節　「尊敬・可能・受身・自発」と「尊敬・使役」の助動詞

一、尊敬・可能・受身・自発を表す助動詞「る・らる」 ……60
二、使役・尊敬を表す助動詞「す・さす・しむ」 ……61
練習十一……63

第三節　「打消」と「打消推量」の助動詞

一、打消を表す助動詞「ず」 ……64
二、打消の推量を表す助動詞「じ・まじ」 ……65
練習十二……67

第四節　「過去」と「完了」の助動詞

一、過去を表す助動詞「き・けり」 ……68
二、完了を表す助動詞「つ・ぬ」「たり・り」 ……69
練習十三……73

第五節　推量の助動詞

一、推量を表す助動詞「む・むず」「けむ（けん）」「らむ（らん）」……75
二、推量を表す助動詞「らし」「まし」「めり」「べし」……78
練習十四……84

第六節　断定、推定・伝聞、希望、比況の助動詞

一、断定を表す助動詞「なり・たり」……87
二、推定・伝聞を表す助動詞「なり」……88
三、希望を表す助動詞「たし・まほし」……89
四、比況を表す助動詞「ごとし」……90
練習十五……91

第七節　奈良時代の助動詞

一、受身・自発・可能を表す助動詞「ゆ・らゆ」……94
二、尊敬を表す助動詞「す」……95
三、継続・反復を表す助動詞「ふ」……95
練習十六……96

第五章　活用のない付属語——助詞

第一節　助詞

一、助詞の性質……98
二、助詞の種類……98

第二節　格助詞

一、格助詞　が・の……99
二、格助詞　を……100
三、格助詞　に……101
四、格助詞　へ……102
五、格助詞　と……102
六、格助詞　より……103
七、格助詞　から……104
八、格助詞　にて……104

九、格助詞　して…… 105
練習十七…… 106

第三節　接続助詞

一、接続助詞　ば…… 108
二、接続助詞　とも…… 108
三、接続助詞　ど・ども…… 109
四、接続助詞　が…… 109
五、接続助詞　に・を…… 110
六、接続助詞　て・して…… 111
七、接続助詞　で…… 111
八、接続助詞　つつ…… 112
九、接続助詞　ながら…… 112
十、接続助詞　ものから（ものの・ものを・ものゆゑ）…… 113
練習十八…… 114

第四節　係助詞

一、係助詞　は…… 117
二、係助詞　も…… 117
三、係助詞　ぞ・なむ…… 118
四、係助詞　か・かは・や・やは…… 118
五、係助詞　こそ…… 119
練習十九…… 120

第五節　副助詞

一、副助詞　だに…… 121
二、副助詞　すら…… 121
三、副助詞　さへ…… 122
四、副助詞　のみ…… 122
五、副助詞　ばかり…… 122
六、副助詞　など…… 123
七、副助詞　まで…… 123
八、副助詞　し（しも）…… 124
練習二十…… 125

第六節　終助詞

一、終助詞　な…… 127
二、終助詞　そ…… 127
三、終助詞　な…… 128
四、終助詞　か（かな）…… 128
五、終助詞　は・も…… 128
六、終助詞　ぞ…… 129
七、終助詞　かし…… 129
八、終助詞　ばや…… 129
九、終助詞　なむ…… 130
十、終助詞　が（がな）——てしが/てしがな・にしが/にしがな・もが/もがな…… 130
練習二十一…… 131

第七節　間投助詞

一、間投助詞　や・よ…… 133
二、間投助詞　を…… 133
練習二十二…… 135

第八節　奈良時代の助詞

一、格助詞　ゆり・ゆ・よ…… 136
二、格助詞　から…… 136
三、格助詞　つ…… 137
四、終助詞　な…… 137
五、終助詞　ね…… 137
六、終助詞　かも…… 138
練習二十三…… 139

第六章　敬語

第一節　敬語の種類

一、尊敬語…… 142
二、謙譲語…… 143

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

三、丁寧語…… 144

第二節　特殊敬語の表現

一、二方面への敬語…… 145
二、最高敬語…… 145
三、自敬表現…… 146
練習二十四…… 147

第七章　文

第一節　文の構造

一、文節相互の関係…… 150
二、特殊な文の構成…… 151

第二節　文の種類

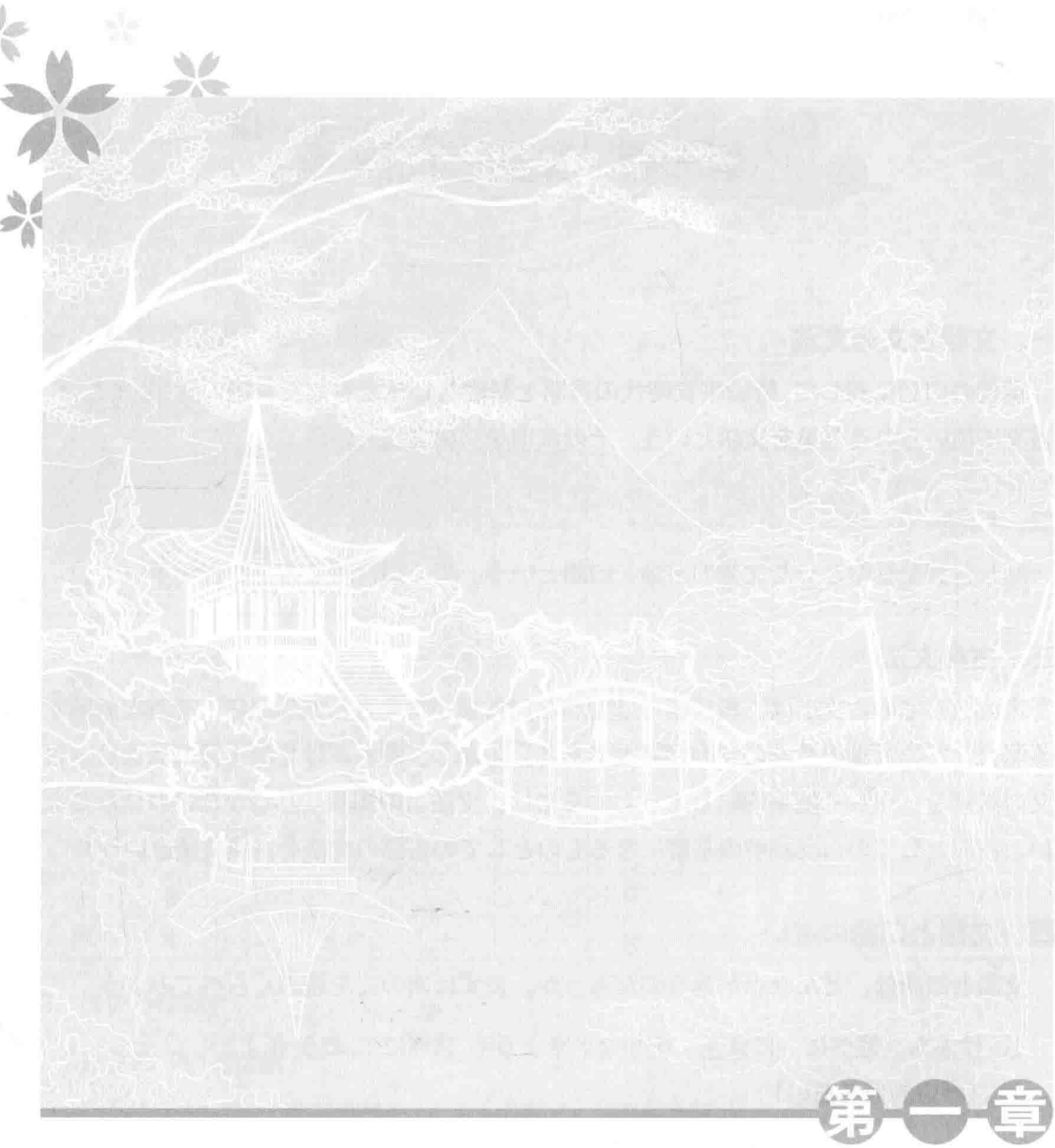
一、文の構造上からの分類…… 152
二、文の機能上からの分類…… 153

第三節　修辞法

一、枕詞…… 154
二、序詞…… 155
三、掛詞…… 156
四、縁語…… 157
練習二十五…… 158

第八章　名作鑑賞

舞姫…… 160
答案…… 193
附录一：文語助動詞の活用表…… 216
附录二：文語動詞の活用表…… 217
后记…… 218
参考書目…… 220



第一章

古典文法入門

第一節　文語と口語

一、文語と文語文法

現代の口語に対して、特に平安時代の言語を基礎として定着した言語の体系、または、古文に用いられる言葉を**文語**という。その法則を**文語文法**という。

二、口語

話し言葉を基準とした文体の言葉を**口語**という。広く現代語を指すことが多い。

三、古典文法

古典としての古文には、現代語では使わない言葉がたくさんあるから、それを読解する場合、古い言葉の意味の解明が必要である。しかし、それだけでは十分ではない。古文の読解を、正しく能率的にしようとするには、文法上の知識に基づかなければならない。古典としての古文読解の基礎になるものとしての古語の文法を**古典文法**という。

四、文語と口語の違い

文語と口語は、どんな点が違うのだろうか。まずは次の文を読みくらべてみよう。

1. けふも　窓べに　にほふ　花かな / きょうも 窓べに におう 花よ。
   （歴史的仮名遣い）
2. 馬□　引きて　童□　帰りぬ / 馬を 引いて 少年が 帰った。
   （助詞「を」「が」を省き、文語の助動詞を使う。）
3. 老いたる□　あり /年老いた 人が いる。
   （文語の助動詞を使い、体言や形式名詞、助詞を省き、活用の違う動詞がある。）
4. いと　大きなる　川□ あり / たいへん 大きな 川が ある。
   （活用の違う動詞もあり、助詞も省く。）
5. 雪の　降る　こそ□　うれしけれ / 雪が 降るのは うれしいよ。
   （特別な決まりがあり、助詞も省く。）

第二節　歴史的仮名遣い

一、五十音図と「いろは歌」

1. 五十音図

段＼行	ア行	カ行	サ行	タ行	ナ行	ハ行	マ行	ヤ行	ラ行	ワ行
ア段	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ
	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
イ段	い	き	し	ち	に	ひ	み	い	り	ゐ
	イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	リ	ヰ
ウ段	う	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	う
	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ル	ウ
エ段	え	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	ゑ
	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	レ	ヱ
オ段	お	こ	そ	と	の	ほ	も	よ	ろ	を
	オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ロ	ヲ

2. 「いろは歌」

原文の「いろは歌」：

いろはにほへと　ちりぬるを　　わかよたれそ　つねならむ
うゐのおくやま　けふこえて　　あさきゆめみし　ゑひもせす

「いろは歌」は同じ仮名を二度使わずに、四十七音の清音を歌に詠んでいるのである。

漢字を当て、濁点を加えて、意味がわかりやすい「いろは歌」：

色(いろ)は匂(にほ)へど　散(ち)りぬるを　　我(わ)が世誰(よたれ)ぞ　常(つね)ならむ
有為(うゐ)の奥山(おくやま)　今日越(けふこ)えて　　浅(あさ)き夢見(ゆめみ)じ　酔(ゑ)ひもせず

意味の解説：

花の色は美しく照り輝くけれども、いずれは散ってしまう。それと同様にわれわれの世の中も誰が、変わらないことがあろうか、いや、移り変わるものである。移り変わりが激しい

無常の世にたとえられる奥深い山を、今日も越えていくような人生で、浅はかな夢を見るようなことはしまい、また、世の中のことに心を奪われて、正気を失うようなこともしない。

二、歴史的仮名遣いを読むときの規則

1. ワ行音「ゐ・ゑ・を」は「い・え・お」と発音すること
   「ゐ」→「い」　例：ゐど［井戸］→いど　　ゐなか［田舎］→いなか
   「ゑ」→「え」　例：こゑ［声］→こえ　　ゑつぼ［笑壺］→えつぼ
   「を」→「お」　例：をとこ［男］→おとこ　　をとめ［乙女］→おとめ

2. ハ行の仮名は、語頭以外の音はすべてワ行の音で読むこと
   はな［花］　ひかり［光］　ふところ　へいけ［平家］　ほお［頬］
   かはら［河原］　こひのぼり　ゆふ涼み　母うへ　草のいほり

3. a+u→o「あう（あふ）」は「おう」の音になること
   あうむ［鸚鵡］→おうむ　あうぎ［扇］→おうぎ　かうし［格子］→こうし
   やうす［様子］→ようす

4. i+u→yu「いう（いふ）」は「ゆう」の音になること
   いうぢょ［遊女］→ゆうじょ　にふだう［入道］→にゅうどう

5. e+u→yo「えう（えふ・ゑふ）」は「よう」の音になること
   えうがい［要害］→ようがい　けふ［今日］→きょう　てふ［蝶］→ちょう

6. 「くわ・ぐわ」は「か・が」と発音すること
   くわきふ［火急］→かきゅう　くわうせん［黄泉］→こうせん
   ぐわいせき［外戚］→がいせき　ぐわんじやう［願状］→がんじょう

7. 「ぢ・づ」は「じ・ず」と発音すること
   ぢごく［地獄］→じごく　ぢざう［地蔵］→じぞう
   はづ［恥づ］→恥ず　づきん［頭巾］→ずきん

8. 「む」は「ん」と発音すること
   行かむ→行かん　なむ→なん

三、係り結び

口語では、文を終止形で言い切るのは普通であるが、文語もそうである。しかし、文語ではこのほかに、連体形や已然形で結ばれることも多い。例えば、文の中で「ぞ・な

む・や・か」が用いられると、文末は連体形で結ばれ、「こそ」が用いられると、已然形で結ばれるのである。このような、文語独特のきまりを「**係り結び**」という。「ぞ・なむ・や・か・こそ」などはすべて係助詞であるから、助詞の章で詳しく述べることにする。

ぞ・なむ……（強意）……連体形で言い切る
や・か……（疑問・反語）……連体形で言い切る
こそ……（強意）……已然形で言い切る
は・も……主に終止形（命令形）で言い切る

例文：

1. これぞなかなかに我本性なりける。（強意）『舞姫』
2. 腰なむ動かれぬ。（強意）『竹取物語』
3. これやわが求むる山ならむ。（疑問）『竹取物語』
4. いづれか歌を詠まざりける。（反語）『古今集』
5. 学問こそなほ心に飽き足らぬところも多かれ。（強意）『舞姫』
6. 親に似て、これも恐ろしき心あらむ。『枕草子』

第三節　文と文節、単語と品詞

一、文と文節

1. **文**とは、一つのまとまった内容や、ある感情を表す一続きの言葉である。例えば、
   ★山高し。
   ○山が高い。
   ★書読む人。
   ○本を読む人。
2. **文節**とは、文を言葉として意味がとれ、読んでも不自然でない程度に細かく区切った単位である。例えば、
   ★波 / いと / 高し。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com